

自分と向き合う

ぼくの最高地点

第一 高橋 芳鳳

四月二十七日、二十八日、富士山にお父さんとぼうけん家の戸高さん（世界八千メートル級の山々を無さん素で登るぼくのそんけいするあこがれの人）をふくむ計六名でアタックした。へい山中の富士山は真冬のように、雪、風、氷のマイナス二十度の世界。荷物は重く十キロ。当日の朝にお母さんが言った。

「日本一の山に、登らせてもらって、日本一の心を教えてもらっておいで。」

ぼくは、だまって登るだけだと思った。見上げると空はどこまでもすきとおり、富士山はまぶしい雪を光らせて、堂々としている。戸高さんが、ぼつりと言った。

「どんなに登ろうとしても、富士山は登らせてくれない時もあるんだ。今日の富士山はわたしたちを、喜んで登らせてくれるようだ。」

山も心を持っているのか？ぼくは富士山という初めての世界へ、足をふみ入れた。と中山

がレスキュー隊やヘリコプターがさわがしく動いていた。だれかが九合五しやくから、かつ落して行方不明になったらしい。

「一度止まったが、また落ちて見えなくなつた。ピッケルも無いので多分助からない。」

今日のそうさくは打ち切りだ。」

とレスキュー隊が言っていた。この話に、ぼくはすっかりこわくなつた。ぼくたちも、かつ落訓練をした。アイゼンとピッケルで命を守る。休けい中もピッケルにしがみつき、足をふんばり氷にはりつく。一日目、六合目にテントはく。へとへとで口もきけない。満月の白い光の中、ねむつた。

午前二時、強風のため全員を一本のロープで結び、アタック開始。低温で飲み物もおおる。氷にアイゼンをふみ入れ、また引き上げる事に集中して前進。がんばって、がんばって、九合五しやくへたどり着く。氷が固くアイゼンもピッケルも歯が立たない。

「登る事はできるが、これ以上登ると体力が持たない、予想外のアイスバーンでできん。」

強風の中、隊長が言った。後少しがんばれば頂上なのに、行かないなんてくやしい！これが隊長の言う、山に登らせてくれない」という事か。かつ落事故もあつたし、ぼくたちがいつ落ちてでも不思議はないとすさまじい氷と強風に、ぼくの登りたいという思いはすっかり飲みこまれてすつ飛んだ。

「今日この時、ここをわたしたちの最高地点とする。」

隊長の声が風の中から聞こえた。眼下には見た事もない大きな景色がぼくをむかえていた。目標があつたから、勇氣、やる気がわいてきた。九合五しやくで下山するのめつたに無い。今ここで起きている事を受け入れるのも勇氣がいる。たん任の先生も、

「やめるといふ勇氣も大事なんだぞ。」

と教えてくれた。また大きな目標を持つてやれば必ず出来るだろう。ぼくの大切な人たちみんなに、ぼくの富士山での日本一の体験と氣持ちを持つて帰る。はずかしくなつてないんだ。また目標を持つゆめにちよう戦していく。登山もそうだけれど、富士山が教えてくれた氣持ちを大切に、五年生の山を最高地点まで登つて行こうと決めた。